

# 児童の体育及び運動に対する捉え方に関する研究

植栗 尚輝（東京学芸大学）

## 1. 目的

本研究の目的は、児童が運動や体育授業をどのように捉えているのかについて、嗜好性や意識、属性や種目の違いをもとに考察することである。

## 2. 研究方法

- 1) 対象者：東京都I区立の小学校2校及び東京都N区立の小学校1校の第4・5・6学年児童523名
- 2) 調査方法：運動や体育に対する嗜好性や意識に関する質問紙調査を実施した。
- 3) 分析方法：質問紙で得られた回答について、因子分析（主因子法・Promax斜交回転）を行った。抽出された因子については、2群間の平均値の比較はt検定、3群間以上の比較は一元配置分散分析を行った。データの分析には、IBM SPSS Statistics 28を使用した。

## 3. 結果と考察

運動や体育への嗜好性や日常的な取り組みに関する結果からは、運動や体育への嗜好性や有能さが高い児童や運動頻度が多い児童は、知識を得ることや考察すること、自分の考えや演技を披露することに意欲的だったり、前向きに取り組む意識が強かったりすることが明らかになった。一方、運動や体育を嫌いや不得意と感じている児童は、体育授業において特に「自己表現」することに対して意識が低いことが明らかになった。また、体育授業において「知識・分析」を重視することには、多くの児童が体育を好意的に捉えたり、楽しんだりすることにつながることを示唆された。

体育授業に対する思いに関する結果からは、「能力」や「交友」が体育授業に対する意識に大きな影響を与えていることが明らかになった。ま

た、「運動の面白さ」を伝えたり、「運動学習」を行わせたりすることが体育授業を好きにさせることが推察された。教師が意識の違いによる運動や体育の捉え方を理解し、工夫を施すことで多くの児童が体育授業に好意的になると考えられる（図1）。

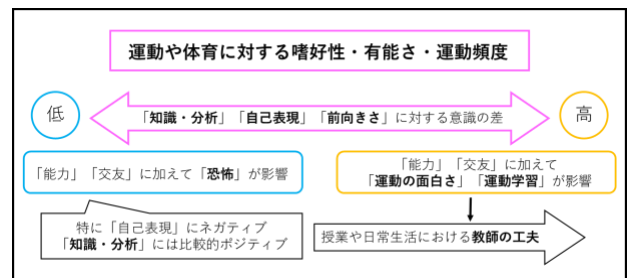


図1 児童の体育や運動に対する意識構造

## 4. 結論

嗜好性や意識によって運動や体育の捉え方は異なるが、多くの児童が「知識・分析」を重視した体育授業を求めていることが示唆された。教師が児童に対して意識的に運動について考えさせることをはじめ、興味や好感度を高める、日常的な取り組みを行っていくといった工夫を施すことで、多くの児童が意欲的に取り組む体育授業が実現できると考えられた。

## 5. 主な参考文献

- 1) 梶将徳・小野雄大(2021) 小学生の体育授業への適応感に関する研究, 体育学研究, 66, 1-11
- 2) 杉原隆(2008) 新版 運動指導の心理学 運動学習とモチベーションからの接近, 大修館書店